実験校における実践 ―その1―

安達町立下川崎小学校

1．学校の実態

本校は，過疎化現象がみられる農山村地帯にある。保護者の90%以上は，農業経営者であるが，割合に出稼ぎが少なく，生活の安定が見られる。教育的関心も強く，学校に対する協力体制がよい。

学校規模は，次のとおりである。

職員数

	校長	教頭	教諭	合計
男	1	1	4	6
女			3	3
計	1	1	7	9

児童数

	低学年団		中学年団		高学年団		合計
	1	2	3	4	5	6	
男	7	7	7	3	9	10	43
女	10	4	6	9	8	5	42
計	17	11	13	12	17	15	85

小規模校少人数学級であるだけに，指導上いろいろと長短を合せもっている。

第1に，教師と児童は親しく，家庭的な愛情がみられ個別指導がゆき届く，その反面，音楽科の合唱・合奏，また体育科のボール運動・集団行動などでは，じゅうぶんな学習活動が期待できない。

第2には，児童は相互の性格・能力などがわかり，親しい仲間意識をもっているが，一様化された人間関係で変化に乏しい。しかも集団内において，児童の順位が固定化しやすく学習意欲が停滞しがちである。

そこで本校では，少人数学級の問題点を除去し，学習指導の改善をはかる観点から，近接2学年による協力教授をとり入れている。

2．研究経過の概要

(1) 昭和46年度

教育センターの指導を受けながら「教授組織の改善」というテーマのもとに，基礎研究をすすめ，本校の教育課題を解決していく手がかりを求めた。

① 研究のねらい

ア 適正な学習集団の弾力的な再編成

イ 教師の特性を生かした教授分担の構成

② 研究内容と方法

ア 個別化・集団化の観点から，大集団・中集団・小集団編成を試みる。

イ 近接2学年を合併した体育科の複数授業のための教授組織と分業・協業のあり方

ウ 研究の推進母体を学年団におく。

(2) 昭和47年度

教授組織の充実をはかるため，運営組織・事務組織上の分掌内容を整理・統合し，これらの業務を各学年団で分担し，処理する方策を講じた。

① 経営組織の改善

ア 教務部――高学年団

イ 指導部――中学年団

ウ 管理部――低学年団

② 体育科のほかに音楽，図工を加え，協力教授の拡大を試みる。

ア 音楽科一部器楽領域

イ 図工科の一部単元